

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2021年10月8日

詩の授業

言葉にはさまざまな働きがあります。私たちは言葉によって意志や情報をやりとりしています。同じく言葉によって複数の人が概念や価値観を共有することもできます。そもそも人間が思考すること自体、言葉が前提となります。「悲しい」という言葉が存在しなければ、心がキリキリと痛み、涙が自然とあふれだす感情がなんであるのか、私たちは概念化することができません。

言葉は人の思いを込める器ともなり、さまざまな文学が誕生しました。なかでも詩は、人の思いを言葉として結実させた文芸といえると思います。

芸術の秋、今回はちょっと趣向を変えて、格調高く(?) 詩の授業に挑戦してみたいと思います!

1 時間目「永訣の朝」

1922年(大正11年)11月27日、岩手県花巻市でひとりの女性が息をひきとりました。鉛色の暗くたれこめた空から冷たいみぞれの降る日でした。24歳の若い命を奪ったのは肺結核でした。現代でこそ結核はそれほど恐れられる病気ではありませんが、有効な治療薬が開発されていなかった時代は不治の病とされていました。女性の名前は宮沢トシ。現在の日本女子大学を卒業後、岩手県立花巻高等女学校で教鞭をとった才媛でした。

若い命が失われることは大きな悲劇には違いありません。しかし医療の進歩が十分でなかった当時、トシの死は決して特別なものではありませんでした。そんな彼女の死を、その死を悼む思いを、100年近い歳月をこえて現在に伝えているものは「ことば」です。

「けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ」から始まる詩「永訣の朝」は、宮沢賢治の生前に唯一刊行された詩集『春と修羅』に収められています。「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」などの作品で知られる詩人・童話作家の宮沢賢治は、当時、花巻農学校の教員でした。咯血し、実家に戻った2歳違いの妹トシを必死で看病したといいます。

56行におよぶ詩には、トシの生涯の最後の朝が描写されています。臨終の床からトシは「あめゆじゅとてちてけんじゃ(雨雪を取ってきてください)」と故郷の言葉で兄にせがみます。まるで幼い子どものようにねだるのです。ふちの欠けたふたつの陶椀を手に「まがつたてつぼうだまのやうに」みぞれの中に飛び出した賢治は、そこで妹の真意に気づきます。トシがみぞれをねだったのは、トシ自身のためではなかった。妹の最後の望みをか

なえることができたという思い出が、自分の死後、兄の心の痛みを癒やし、兄の生涯を照らす光となることをトシは願ったのです。

「Ora Orade Shitori egumo（私は私でひとりでいきます）」トシは静かに死を受け入れます。そして賢治は、トシが食べるふた碗のみぞれが天上のアイスクリームとなり、トシとすべての人たちに清らかな資糧をもたらすことを「わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」のです。トシが息をひきとったのはその日の夜8時半でした。

賢治はトシの死後、葬儀までの2日間に3編の詩を書いたといえます。その一編が「永訣の朝」です。ことばをつむぐ行為の中で、賢治の深い喪失感、激しい慟哭は少しずつ浄化され、静かな祈りへと昇華していったのかもしれませんが。みぞれのように透きとおる悲しみと祈りのことばは、100年の時を経て、今なお読む人の心を揺さぶらずにはおきません。

筆者が茨城高校の生徒だったとき、高1の国語の授業で「永訣の朝」を読みました。そのとき、「今日のうちに妹が遠くへ行ってしまう」ことがなぜ作者にはわかったのか、ということが議論になりました。さまざまな意見が出る中、クラスの秀才A君が「永訣の朝はトシの死後に回想して書かれている、だから作者はその日に妹が亡くなることを前提に描いているのだ、同じく回想の詩であることから、時間とともに作者の悲しみは客観化されていったのだ」というような意見を整然と述べていました。世の中にはなんて頭のいいヤツがいるのだろう！と驚いたことを懐かしく覚えています。

2 時間目 共鳴する思い

『唐詩選（とうしせん）』は16世紀末から17世紀初頭にかけて成立した漢詩集です。唐の時代、中国は大いに繁栄し、文化も隆盛をきわめました。なかでも漢詩の分野では、李白（りはく）や杜甫（とほ）をはじめ優れた才能がきら星のごとく登場しました。『唐詩選』はそうした唐代の詩465編を収録しています。

『唐詩選』の中に、「西山」という五言古詩が収められています。作者の常健は、邢州出身の詩人で、進士に及第し役人となった後に、隠者の生活にあこがれて山中で隠棲生活をおくったとされる人物です。生没年不詳で、その生涯や人となりなどの詳細も伝わっていません。

筆者が『唐詩選』前野直彬注解（岩波文庫）を最初に読んだのは教員になってからで、おそらく20代後半くらいのことではないかと思えます。「西山」の詩を読んでいて、その5句目、6句目に目がとまりました。

「物象 余清に帰し／林巒 夕麗を分かてり（ぶっしょうよせいにきし／りんらんせきれいをわかてり）」 解釈：万物の姿は秋のすがすがしさの中にとけこみ、林や峰の影は夕映えを分割して黒くそびえる。＊別説あり

この二句をはじめて目にしたとき感じたのは、「あ、この景色、いつか見たことがある」という既視感（デジャヴュ）に似た感覚でした。

秋の黄昏時の冷たく澄んだ空気があたりに満ち、目に映るすべての物は薄暮の中にとけこんでいく。壮麗な夕焼けが炎のように西の空一面をいろどり、夕焼けを背景に木々や遠くの山の峰は黒い影となってくっきりと浮かびあがる……。幼い日、庭先で母の帰りを待ちながら見たのか、中学の部活動の帰り道、友人と自転車をこぎながら見た景色なのか、はっきりとした記憶はありませんが、間違いなく作者と同じ景色を経験した確信がありました。

遠い過去、異国の地に生きた、どんな個性を持ちどんな生涯を送ったのかもさだかでない人物の思いが、ことばを媒体として自分の思いと共鳴し、一つの美を共有したという感覚を不思議な感動をもって受け止めた経験でした。

詩や小説を読む中で、一つの言葉、一つのフレーズが、電気が走るように心に響くという経験はないでしょうか。「この感じ、わかる」とか「理由もなく惹きつけられる」という感覚が、作品中に一箇所でも二箇所でもあったとしたら、その作品は君と共鳴しているのです。

筆者自身も、10代、20代の読書の中では、特別な言葉との出会いがしばしばあったような気がします。年齢を重ねるにつれて、そんな出会いも少なくなっていました。寂しいかぎりです。

3 時間目 「白萩の散る」

短歌や俳句は日本語の文学的伝統の中で生まれた定型詩です。日曜日の新聞の「〇〇歌壇」とか「△△俳壇」とかいうページに、アマチュアの作者が創作した短歌や俳句が掲載されているのを見たことがあるでしょう。きちんと調べたわけではありませんが、千数百年以上も昔に成立した詩の形式が今日まで受け継がれ、多くの作者によって創作され続けている文化が存在するのは、日本くらいではないでしょうか。短歌や俳句は日本が世界に誇りうる文化だと思います。

われの眼のつひに見るなき世はありて昼のもなかを白萩の散る 明石 海人

数年前、『近代秀歌』永田和宏著（岩波新書）を読んでいた、上記の短歌に出会いました。不勉強で申し訳ありませんが、明石海人（あかしかいじん）という歌人を筆者はそれまで知りませんでした。『近代秀歌』によれば、1901年（明治34年）に生まれた海人は、26歳の時ハンセン病と診断され、瀬戸内海の隔離施設に入所、ハンセン病に起因する眼疾により失明しながらも、亡くなるまで歌を作り続けた歌人である、と紹介されています。享年は38歳でした。

光を失った作者の眼には、秋の真昼のあかるさの中を音もなく散る白萩が映っています。それはかつて作者が自分の眼で見た光景の記憶であり、残像です。二度と再びその光景を見ることはできないのだという深い諦念と、記憶の中で果てもなく散り続ける白萩の小さ

な花びら。「われの眼のつひに見るなき」美への憧れは、それがかなえられないからこそ、決して作者を離さないのです。

苛烈な運命に見舞われ、差別と絶望の中で歌を詠み続けた作者の思いは、余人には想像すべくもありません。静かで悲しく、美しい歌です。

ハンセン病は、皮膚と末梢神経を主な病変とする感染症です。結核同様、かつては死にいたる病とされ、重症化すると顔や手足に変形を生じる場合があることから、人々に恐れられていました。実際には感染力の弱い病気ですが、間違った認識からハンセン病患者は隔離の対象となり、一生を施設の中で過ごすことを強制されてきました。遺伝病ではないにも関わらず、施設内で患者同士が結婚する場合には優生手術（避妊手術）が条件とされてきました。

ハンセン病は、現在では治療法が確立している病気です。有効な治療薬が発見された後も、日本では「らい予防法」が1996年まで存在し、偏見、差別、人権侵害の長い歴史が続きました。

4時間目「I Can Do It」

黒板に I Can Do It 風光る

秋野 暢子

TBSテレビのバラエティ番組「プレバト」の俳句の才能査定ランキングが好きで時々観ています。

そういえば以前、TVドラマの「ドラゴン桜」の話を書いたら、その後、中学1、2年生とおぼしき生徒から「校長先生は、いつもテレビばっか観てるんですかあ？」と唐突に聞かれました。「ドラゴン桜を観ている」がどうして「テレビばっか観てる」に飛躍するのかは今もってナゾですが、興味のある番組は観ます。テレビばっか観ているわけではありません。

話を戻しましょう。俳句の才能査定ランキングでは、写真で示される兼題にそって芸人人やタレントが俳句を作り、俳人の夏井いつき先生が点数化してランク付けをします。MCのダウンタウン浜田さんと出演者のやりとりや、夏井先生の「超」辛口コメントも面白いのですが、時々出演者の俳句の中に「むむっ」と思わせる作品が登場するのが楽しみです。上記の「黒板に…」の句もその一つ。個人的にとっても好きな句です。

この句が紹介されたのは何年か前の3月、「卒業の写真で一句」の回だったと記憶しています。作者である女優の秋野暢子さんは「才能あり1位」を獲得されていました。

俳句には、必ず「季語」を含むというルールがあります。季語とは読んで字のごとく季節をあらわす言葉です。「菜の花（春）」「花火（夏）」「夜寒（秋）」「手袋（冬）」など、それぞれの季節の時候や自然、人間の営みなどが季語となっていますが、中には「ブランコ（春）」「ラグビー（冬）」のように、必ずしもその季節限定のものでない季語も存在し

ます。同じ自然現象でも「霞（かすみ）」は春、「霧（きり）」は秋の季語です。

「黒板に…」の句の季語は「風光る」です。立春を過ぎた2月後半から3月にかけて、日差しのぬくもりに少しずつ春を感じられるようになるころ、吹き渡る風さえもきらきらと光を帯びているように見える、という感覚的な言葉です。

職業柄、数多くの卒業に立ち会ってきました。本校は一年に中高2回の卒業式があるので、考えてみると70回近い卒業式を経験していることになります。もしかしたら「卒業式ギネス記録」が狙えるかもしれません。

卒業式の午後、生徒たちがいなくなった教室には何ともいえない寂しさがあります。他に形容する言葉が思いつかなかったので「寂しさ」と書きましたが、正確には寂しさとも少し違った、いろいろな思いが入り交じった何とも名付けようのない感覚です。

「黒板に I C a n D o I t 風光る」口ずさむと、卒業していった教え子たちの面影が思い浮かぶ気がします。笑った顔、真面目な顔、すまし顔、少し怒っている顔もあります。ああ、あの生徒たちはそれぞれに「I C a n D o I t」と声にならないことばを発しながらこの学び舎を巣立っていったのだなあ、ということが、胸にすんと落ちるように、素直に納得できる句でした。

室町時代の連歌にルーツを持つ俳句は、江戸時代に至り、庶民によって創作される文芸となりました。現代でも、老若男女を問わずたくさんの愛好家が出て、高校生による「俳句甲子園」などのイベントも盛んに行われています。

十七音という世界で最も短い詩は、詠者の思いを最も素直に表現します。日常の一コマが詩となって、読み手の心をうつのです。

総括・反省

はじめに「詩の授業をします！」と宣言しましたが、ここまでの文章を読み返してみて、「とりあえずこれは“授業”ではないよね？」と、他人から言われる前に自分でツッコミを入れておきます。

30年以上、国語の教員として教壇に立ってきましたが、詩の授業が一番苦手でした。詩は人の思いを伝え、受け手はそれによって心を動かします。作品をどう受け止めるかは、受け手によって異なるのが当然です。

授業では、学習活動に対する「評価」をすることが求められます。知識や理解は評価できますが、感動は評価できません。詩の形式や、修辞法、主題は何？など「評価」のための知識や理解を前提とした授業を行っている、せつかくの詩がバラバラになって呼吸を止めてしまうような気がして、「詩の作者の人、すまん！」という気持ちで授業をしていました。

出典を忘れてしまいましたが、感動は何のための機能か？という文章を読んだことがあ

ります。人間の心の（脳の）働きにはそれぞれ機能や目的があります。三大欲望と言われる食欲、性欲、睡眠欲は、いずれもヒトの生存や生殖に関わる機能です。喜怒哀楽などの感情も、例えば「怒」は、敵に襲われたときアドレナリンを出して戦うことで危機からのがれるため、などの生物としての機能が想定できます。人間以外の動物にも喜怒哀楽に似た感情は存在しています。

しかし、「感動」はどうか？朝もやの中、水平線を薔薇色に染めて黎明の光が訪れるとき、山頂から吹き下ろす風がニッコウキスゲの群生をいっせいに揺らすとき、冬の夜、ひとりグレゴリオ聖歌の荘厳な調べに身をゆだねるとき、そのときの心の震えにはどんな意味があるのでしょうか？

感動には、個体の生存や種の存続に役立つ実際的な機能はありません。しかし、もしも感動が存在しなかったら、人の生はどんなにか空虚に違いありません。感動は、人間だけに与えられた、創造主である自然からの特別な贈り物なのかもしれませんね。

授業終わり。

～「詩の授業」で紹介した詩～

永訣の朝 宮沢 賢治

けふのうちに

とほくにいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（あめゆじゆとてちてけんじや）

うすあかくいつさう^{いんざん}陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる

（あめゆじゆとてちてけんじや）

青い^{じゆんさい}蓴菜のもやうのついた
これらふたつのかけた^{たうわん}陶椀に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつぼうだまのように
このくらいみぞれのなかに飛びだした

（あめゆじゆとてちてけんじや）

^{さうえん}蒼鉛いろの暗い空から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる
ああとし子

死ぬといふいまごろになつて
わたくしをいつしやうあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたしもまつすぐすすんでいくから
（あめゆじゆとてちてけんじや）
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
……ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系^{にさうけい}をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ

（Ora Orade Shitori egumo）

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
（うまれてくるたて
こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる）
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらずやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

註)「うまれてくるたて……」

またひとにうまれてくるときはこんなにじぶんのことばかりでくるしまないようにうまれてきます。

一身 軽舟と為る	いっしんけいしゅうとなる
落日 西山の際	らくじつせいざんのきわ
常に去帆の影に随い	つねにきよはんのかげにしたがい
遠く長天の勢いに接す	とおくちょうてんのいきおいにせつす
物象 余清に帰し	ぶっしょうよせいにきし
林巒 夕麗を分かてり	りんらんせきれいをわかてり
亭亭として碧流暗く	ていていとしてへきりゅうくらく
日入りて孤霞継ぐ	ひいりてこかつぐ
洲渚 遠く陰映し	しゅうしょとおくいんえいし
湖雲 尚お明霽なり	こうんなおめいせいなり
林は昏くして楚色来り	はやしはくらくしてそしょくきたり
岸は遠くして荆門閉ず	きはとおくしてけいもんとず
夜に至りて転た清迥	よにいたりてうたたせいけい
蕭蕭として北風厲し	しょうしょうとしてほくふうはげし
沙辺 雁鷺泊し	さへんがんろはくし
宿処 蒹葭蔽う	しゆくしょけんかおおう
円月 前浦に逗まり	えんげつぜんぽにとどまり
孤琴又揺曳す	こきんまたようえいす
冷然として夜遂に深く	れいぜんとしてよるついにふかく
白露 人の袂を沾す	はくろひとのたもとをうるおす

〔解釈〕

わが身を小舟に託して旅ゆくうち、日は西山の上に落ちかかる。あの西山は去りゆく舟のあとを追うようにいつも見えている山で、はるかに続く大空につらなっている。この日暮れ、万物の姿は秋のすがすがしさのたちこめる中にとけこんでいき、林や峰々は夕ばえのうちにくっきりと浮かびあがる。はるかに去りゆく揚子江の青い流れは暗く、日の沈んだあとにはひとひらの夕やけ雲が落日の色を受けついで。川の中州やなぎさは遠いかなたに輝いてまたかげり、湖上の雲はまだあざやかな白さを示している。あたりの林は黒々と、楚（国名）の気配が立ちこめて来るし、かなたの岸边、荆門も閉ざされた。さて夜に入れば空気はいよいよ清冽さを増し、北風がびゅうびゅうときびしく吹く。川辺の砂地では雁や鷺がねぐらにつき、わが舟をとめたあたりには葦がおおいかぶさるように茂っている。まるい月が出て、目の前の入り江に影をおとした。そこへ、ただ一つ、琴の調べが揺れ動いてゆく（そのしらべにあわせて、月かげもゆれているような）。冷え冷えとして夜はふけた。岸部に立つ私の袂を、白露がしとどにぬらしていた。